

「スタートライン」

高千穂町 甲斐 涼子

私が初めて「選挙」を経験したのは中学生の時、生徒会役員選挙です。1年に1回必ずあるその選挙は投票率約100%といっても過言ではありません。生徒たちは、だれが私たちの指揮をとって進めていくのかに注目し、立候補者の話を聞いて自分自身で誰に投票するかを決めていました。

私は有権者と立候補者の両方を経験し、生徒会役員に選ばれたときは、代表としてみんなを率いる責任を感じ、怖くなったことを覚えています。選挙は、有権者の1票が投票結果を左右するという事、当選者はよりよくしていく努力を続けなければならないという事を知りました。中学、高校を通して6回行われた選挙は、学生のうちに選挙を身近に感じる良い機会でした。

実際の選挙には、生徒会役員選挙とは大きく異なるところがあります。立候補者の誰に投票するかという選択肢のほかに、もう一つ「投票しない」という選択肢が存在することです。この選択をする人数が投票結果に大きく関わってきます。

選挙が実施されるたびに若者の投票率の低さは必ずと言っていいほど取り上げられます。では、実際はどうなっているのでしょうか。総務省によると平成29年に行われた衆議院議員選挙の全体の投票率は53.68%、それに対して10代の投票率は40.49%、20代は33.85%と、大きく下回る結果となりました。数値から見ても若者の多くが選挙に行っていないことは明白です。

近年有権者の年齢が18歳以上と変更され、学校教育では選挙についての授業も行われています。授業では選挙の仕組みや投票の仕方については教えてもらえますが、どの政党に投票するのが正解かは教えてもらえません。世の中には様々な主義・主張がある中で、立候補者を見極めなくてはならないからです。そのために自分でできることは数ある政党を知り、政策について学ぶことです。SNSやインターネットでの選挙活動が解禁され情報収集は容易くできるようになりました。しかし、得た知識をかみ砕いて理解する場があつてこそ、その知識は選挙で生きてきます。

そこで、選挙について意見交換をする機会を設ける必要があると考えます。様々な年代で選挙について学び、語り合うことで自分の意見をしっかりと持つ

ことができます。また、選挙権を持つ前の小中学生の時期に政治と生活の関りについて知ることや、自分の考えを発表する機会を作ることも必要です。幼いころからみんなで意見を出し合って何かを決め、解決していくという経験をし、選挙も同じであると知ることによって将来投票する若者を増やすことができると考えます。有権者になる前の世代も学ぶことが必要なのです。

今回わけもんの主張に参加するにあたり改めて選挙について調べ、考え、選挙の投票に正解、不正解はないのだという事に今更ながら気づきました。当選者が良かった、悪かったといわれるのは結果論に過ぎないのです。

若者の皆さん、選挙に足を運んでください。投票しないという意思表示よりも、わからないながらも 1 票を投じる方が世の中を変える力になります。この人に投票してよかったのかと悩むこともあるかもしれませんが、しかし、悩み続けることこそが、未来をより良くする道なのだと信じています。私たちはまだそのスタートラインに立ったばかりです。今こそ投票に行き、未来への一步を踏み出しましょう。